



赤とんぼ記

室生朝子

講談社版

赤とんぼ記



KODANSHA

© 室生朝子 一九六二

昭和三十七年一月二十日 第一刷発行

二八〇円

著者 室生朝子

発行者 野間省一
東京都文京区音羽町三ノ一九

印刷所 豊国印刷株式会社
東京都文京区大塚坂下町一一四

発行所 株式会社 講談社

振替 東京 三九三〇
電話 大塚(九四)大代表三一一一
東京都文京区音羽町三ノ一九

(製本 鈴木)

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

赤
と
ん
ぼ
記

阿梨子は何時しか、二十五歳になっていた。

身体の不自由な母を、多くの困難と向きあって、軽井沢の山荘に疎開して以来、終戦後もそのまま、寒い冬を我慢しながら、住んでいた。それは、阿梨子の父の仕事が急に上京しなくても差支えなかったからだ。騒々しいなかの東京に母を連れて帰るには、疎開する時ほどの意気込みが母にもなく、不自由とはわかりながら、山での生活を切り離すことは、容易には出来なかった。

書物を通じての真面目なつきあい、家庭を含めての友人、又テニスの若い仲間、阿梨子を含むこれらの人達の中で、手の足りない阿梨子の家庭を助けながら、彼女流にこまめに体を動かして、楽しく生活していた。それと平行して阿梨子にも、いくつかの縁談は、父の周りの誰かしらから起っては来ていたが、そのいずれにも阿梨子の心は動かなかった。勿体ないと母がいうようなものも、阿梨子は断っていた。

阿梨子の心の中にはその頃、大きい存在として佐武という七つ年上の青年が住んでいた。

阿梨子より背の高い、健康そうな浅黒い肌の佐武は阿梨子姉弟が凝りはじめていたテニスを通じてコートで知り会った。

大きいタオルを肩から提げ、薄いブルーのツウィードの上衣に白ズボンという恰好で、

晴天の限り佐武はコートに現われて来た。佐武のいないコートは、阿梨子には何の興味もなく、球を追うのか佐武に会うためかわからないテニスを、毎日繰返していた。コートの網越しに、ボディーが曲線になっている茶色い特徴のある彼の自転車、阿梨子はコート際の坂を降りながら見出すと、ほっとする。そこから阿梨子の一日が始まるほどであった。

彼は相手にテニスは、上手かった。従って下手な阿梨子にとっては先生格であり、阿梨子の気ままに右左に飛び交う球を、上手に受けては返してくれていた。

阿梨子と佐武の間には、勿論感情のゆききは、はっきりと現われていた。狭いテニスコートに於いて、二人の仲のよいのは誰もが知り、又誰一人として中傷するものもいなかった。

だが阿梨子にとって残念なことには、佐武とのつきあいは、お互い同志の家庭から全く切り離され、唯そとに於いて、それもテニスコートを中心としてのみに限られていた。阿梨子は父に佐武のことを、秘密にしていた。だが父の批判は厳しかった。運動に全くの理解のない父は、それは父自身が若い頃から運動に、親しむ機会が無かったからかもしれないが、雨の日以外は食事時を除いては殆んど一日中、弟の邦彦とラケットばかりを振り廻している阿梨子に、父の風あたりは強かった。父の機嫌のよい時を見こして、裏庭の畠ごしに、自転車に乗って素早く出掛ける。こんな阿梨子の背後に、父の阿梨子と呼ぶ声が風に乗って、宙に浮いているような時も何度かあった。まるで憑かれているように、テニスと佐武に懸命になっていた阿梨子には、父の心くばりなどは無関心であった。運動と男友達

というものを楯にして、父親への娘の幼ない僅かな抵抗が其処にはあった。

阿梨子は晴天である限り、佐武とコートで会っていた。それほど佐武は何もすることのない、暇の多い男であった。

秋も深まりコート終いの日が過ぎれば、すぐに早い霜が来る。冬になれば二人は、自然と会えなくなつて来るのだ。

一日という日が過ぎれば、佐武に会えない日が、その一日分だけ近づいて来る。阿梨子にとっては勿体ないほどの大切な一日一日であった。

目の前までに来てゐる寒さに向つて、苛立たしさと焦慮の中にいた時、ある日二人は、気晴らしに南の原っぱに、遠乗りに出かけた。空は高く深かった。辺りの木々は、そろそろすくれないに、下枝から変りつつあった。真紅の蔦がから松にからみつき、かるうじて今まで咲残っている河原撫子が、僅かだけ蔦の紅さと向き合っている、濃いぼたん色の色彩であった。のどかで静かな少し肌寒い風が、二人を囲んでいたが、阿梨子達は言葉を変わさない。唯、お互いの存在が余りにも身近かであるという、それだけの普段の生活から隔離されている時間を、楽しんだ。斜陽に映えているから松の樹肌は、鱗状であるにもかかわらず、妙な滑らかさで阿梨子の背中に感じられていた。

十一月にはいり氷る朝が続くと、佐武との没交渉の時間を、それは翌年の雨期が過ぎる迄、阿梨子は持たなければならなかった。そして、佐武が毎日をいかに過しているか、阿梨子には皆目解らないのであった。

寒中に佐武は、愛犬のポインターを連れて、山に籠り鳥を打ちに出掛けて行った。彼の

勇ましい身仕度を、阿梨子は町の角でチラリと見かけ、訳のわからない興奮にとりつかれたこともあった。

阿梨子は佐武の家の前を、用事もないのによく自転車で素通りすることがあった。彼の自転車は門際に立てかけてあると、今日は家にいるという妙な安堵感で、阿梨子は満足していた。だが反対に彼が家に居ないということがわかると、阿梨子は落着かない。そこまですべて彼の生活に干渉を持つ必要はないのであろうが、まだ若すぎた阿梨子は、たとえ会わない時であっても、佐武が何をしているかを、阿梨子の出来る範囲内で知りたかった。

クリスマスには佐武の捕えた山鳥が、一羽贈られて来た。黒と焦茶の胡麻塩まだらの、艶のこい太っている山鳥であった。

阿梨子は、こわごと抱いた。彼女の手には毛並は柔らかいが、ひやっこい体の芯の感触があった。好きな佐武からの贈り物ではあったが、この美しい鳥を的にして猟銃を放つという佐武の心理が、唯鳥を打つ楽しみそれだけに、どれほど徹底しているのだろうか。古くから鴨打ちの行事はあるが、殺す楽しみとスリルのほかに、生命あるもの、美しい生きものとしての的が、佐武の神経を、ほんの僅かでも動かすことはなかったのであらうか。魚でも肉類でも、命のあるものとしての存在から離れた食品となれば、誰も気を使いはしない。だが、この山鳥は余りに美しく哀れであった。

しかしそれを料理出来るものは、家には阿梨子しか居なかった。裏山の陽だまりに、バケツ一杯の水を提げて、阿梨子は長い時間をかけて丁寧に毛を筆った。毛のすっかりなくなった皮むきだしの山鳥は、いかにも悲しいものであった。尾の中の一番長い羽根二本

を、机の筆立てに飾った。くっきりとした茶の縞目は美しかった。その羽と佐武との対照は、彼の心の微妙な動きなどは、阿梨子には、はかり知ることは出来なかった。と同時に、佐武の持ち備えている性格で、今まで阿梨子にわからなかったものが、理解出来たひとつのものであった。

一年の半分を会わないのではなく、会えない時をお互いの立場に於いて持たなければならなかった。このような奇妙な交際は、不思議と素早く繰り返され、夏は輝やく強い太陽の元で、ありったけの情熱を持ちテニスを通してつきあい、冬は冬眠動物のように、ひっそりと静かにしていなくてはならなかった。

漫然とした懐かしさに、阿梨子は自分で自分を制し切れない日も、酷寒の凍てつく氷を毎日見てくらしている幾日かがあった。自分が頼りなく落着かない時に、佐武はどんな考えを持っていたのであるかと、そこに佐武の誠意の少ないものを、阿梨子は毎年冬になると、見つけ出していた。鳥を打つという事で、阿梨子に会いたいという慾望も消されていたのかもしれない。佐武に勇氣という男らしいものが、ほしかった。だが、その勇氣を佐武が本氣になつて發揮したら、恐らく阿梨子は戸惑つたであつたらう。お互いの立場というものの中で、男らしさは愛している女にこそ、与えることは出来る筈である。阿梨子は相手が目の前に現われない状態で、ひとり落着かぬ日を過していた、その時に、突然思ひもかけず佐武と道で出会った。

そのころの軽井沢では、疎開中の外国人達が、日本金の必要から、個人で衣類や家具の売立てをやっていた。町の角でそれらの貼紙を見付けては、阿梨子もよく出掛けていた。

その当時としては、決して手にたやすくは入らない、純毛品など体に合いさえすれば、見つけ出せることが多かった。

その夜もユダヤ人の家から、阿梨子は大きい風呂敷にひとかかえの、洋服やスエーター類を買って、暗い道を歩いていく時であった。

お嫁に行く時の為に、着れるものがあつたら、纏めて買ってきたまえという、父の言葉は嬉しかった。戦争以来、阿梨子の洋服は、余り新調される機会もなかった。事実ものないのも理由であつた。だが、誰の処にお嫁に行くために、これらのものを求めるのであるうか。相手も目標もないのに、それを対象にしないでならぬのが、少々ばかり阿梨子を憂鬱にした。その相手を阿梨子は頭の中で勝手に、佐武に置いてみると、ひとつの形は出来上るのではあるが……。と、まとまりのつかない疑問だらけの中に、阿梨子はいた。こんなことを考えて暗やみの中を歩いている阿梨子の前に、佐武は立ち現われて来た。まるで阿梨子がこの時間に、この道を歩くのを佐武が知っていたほどな、突然な出現であつた。だが、これは全くの偶然にしか過ぎなかつた。佐武が自宅に帰る途中の道であつたから、久しぶりに会つたのではあるが、佐武は表面は冷然としていたが、広い通りに出る道程を、何度も往復をした。佐武はなかなか阿梨子を離しはしなかつた。

阿梨子と佐武の交際は、三年間、夏、冬と途切れ途切れではあるが、続いていった。しかし二人の間は、何時になつても進展のきざしは、何ひとつとして見えては来なかつた。

佐武は阿梨子に、結婚しようとは決して、言葉の端にも出さなかつた。「結婚」という言葉は、何かの折の会話にも出ることはあつたが、生活出来ない、という理由で、佐武は

話題をはぐらかしていた。

佐武には定まった彼の仕事というものは、なににもなかった。両親、兄、妹、と健全な中で、何不自由なくのんびりと生活していた。よいわかものの生活態度としては、決して賞めるべきものではないが、自分の環境というものの中にはまり込んで、決して自ら働こうなどという動きの一片も、阿梨子には見出せなかった。一緒の生活を……ということとを、阿梨子は何度も想像も考えもしてはみてが、現在の彼の生活態度から押せば、それは泳ぎの出来ないものが海にはいるような、危険性ばかりのものであった。また、これらの状態をぶち壊そうという意気、ごみも、佐武は示してはくれなかった。佐武は、恋愛の相手だけで、それ以上の何物も阿梨子には与えてはくれない。結婚を全く切り離れた存在として、阿梨子の心の中の佐武は、変貌していった。丁度阿梨子がこれらの状態になっている時に、阿梨子と佐武の親しさが、何処から父の耳に聞えた。父は言った。

「あの男との結婚はいけない、友達としてだけつきあいなさい。」

内緒にしおわせていたつもりの阿梨子は、ひどく驚きはしたが、父は交際を止めてしまえとは、決して言わなかった。

年若い阿梨子がどれほど佐武を愛していたにしろ、父の一言は阿梨子にとっては、決定的な言葉となった。父の言葉に叛いてまで、両親や家庭から完全に離れ切って、佐武のところにとび込んで行くには、いたって頼りない点が多かった。遅まきながら父の言葉を得てはじめて、それらがわかったのであった。だが父の言葉によって阿梨子が佐武を愛している心にはひとつとしての変化も来らしはしなかった。

佐武と知り合つた同じ頃、阿梨子は物資乏しい輕井沢の町中で、ボタンやアクセサリーの、小綺麗な店を出している、喜美子を知った。彼女は色の白い、ぽっちゃりとした美人であつた。

黒のボタンの芯に細かい花模様のピンクが沈み、薄いブルーの艶のある小粒の貝ボタンは、一ダースずつ錫の紙にはりつけてあつた。娘らしい楽しみも余りない戦争中であるから、ごく小さい貝ボタンの、底光りのする艶に少女らしい夢や、何時使用出来るかわからない糸レース三米、阿梨子は毎日喜美子の店に寄つては、少しずつ買溜めていた。煙のような微かな若さを、喜美子の店から分けてもらつていた。

木々の芽も出揃い、山肌のあちこちに春一番早く咲く、朴の花の白い渦が、遅咲きの山桜に混つて見分けられるころ、喜美子は一人の青年を阿梨子に、紹介した。

背の余り高くない、髪の毛はごく長いオールバックで油気はなく、派手なコバルト色のジャンパーを着ている青年であつた。上等の薄手のウールのジャンパーの、前開きのチャックと、袖口についている尾錠の金具の色が、その時の阿梨子の印象として、青年の顔貌よりは、強く記憶に残つた。

喜美子は言つた。

「弟です、海軍の報道部の写真班として、行つていましたが、一寸体の具合を悪くして、歸つて来ました。今迄小瀬^{こせ}の山の中で、宿屋のおじさんと薪を切つて、体を休めていまし

たが、元気になったので、今日から、私達とここで一緒に生活をします。どうぞ仲よくして下さい。」

阿梨子は至って普通の、挨拶をした。

「姉から、お話はいろいろと聞いています。どうぞよろしく。」

この、あたりの柔らかな、静かな青年は、知義といった。

その後、喜美子、知義、その弟の知二、阿梨子と弟の邦彦を交えての、若い者同志の交際が始まった。

軽井沢の町中には、若い青年を殆んど見かけぬほどに、皆戦場に出ていってしまった。

そのうちに邦彦にも、最後の動員の赤い紙が来て、故郷の金沢に、いとも沈痛な面持をして、入隊した。その間に知義も亦、カメラを肩に掛けて、鹿児島の方の基地に、再び出て行ってしまった。

皆、居なくなつて後、間もなく終戦となった。

九月の末に邦彦は、かまきりの如く骨と皮になり、蒼い顔をして唯軍靴だけをはいて、ぼんやりとして阿梨子達の前に帰つて来た。

知義も邦彦の復員と前後して、元氣に戻つて来た。知二はどうした訳か召集を受けず、警察に籍をおいたまま終戦となった。

十月の或る晴れた日、皆無事に再び揃つたお祝として、阿梨子達五人は、何処かの原っぱで野外炊事を目的として、自転車で遠乗りに出掛けた。

天気はあつ過ぎもせず、風も無い。五人は心のびたりと一致した楽しい気持で、白い国道を何処迄も、ペダルを踏んでいった。五人の中で何時も遅れ勝ちになるのは、喜美子であった。彼女は余りペダルを普段踏みつけず、買出しにも行かなかった。阿梨子はなるべく自転車を遅く走らせ、喜美子と話をしようと思つてはいても、つい生来のせっかちから、邦彦達に負けまいと、力まかせに踏むペダルは、先頭になりがちであった。そして阿梨子のすぐ右側には、長い髪の毛を風になびかせて、いつも知義が居た。

町を離れ、次の町並をひとつ越え、信越本線を渡り、だらだら坂を登ったり降ったりして、相当に走った。途中の農家によつて、阿梨子は野菜類を求めて来た。掘りたての葱とキャベツの小さいもの一つ、白菜の时期的にまだよく巻いていないものなどを。食糧の豊富になった五人は、再び元気に、今度は火を燃やす場所を見付けるべく、又もや走った。

ひと部落を過ぎると、すぐ左手に小丘のような小山が二つ、折重つて聳えていた。下から見上げた小山とは異り、いざそれぞれ手に荷物を持つて登ってみると、思ったより坂は急で、頂上まではかなりな道のりがあつた。根っこばかりになった薄の株が多かつた。

鼻の頭に汗をかきながら登った頂上は、唯のがらんとした狭い、原っぱにしか過ぎなかつた。だが景色はよく、浅間山は真正面に、長い裳裾を引いていた。

手頃な石を見つけ、それを組み合わせて、簡単ではあるが即席にしては立派すぎる竈が、二つ出来上つた。

風が無いと思つてはいたものの、山の頂だけに、少々の中らぎはあつた。枯枝を燃やす煙は、ある一定の処ばかりに薄あおい線を引いていた。そこに誰も坐らなければ、けむく

て目を明いていられない、これらのことから避けられた。あお白い煙は、ある一本は地面を這うようにし、他の一本は空中高く伸び、白い細さは一面に拡がり、浅間山の裾の色と交わってしまう。あかいほのおは、長く短く揺れ続き、やがてお鍋の中はグググと踊り出してきた。五人とも走った消耗に、相当の空腹を覚えていた。瞬たく間に、第一回のお鍋の中は、空っぽになってしまった。

傍のもうひとつの竈では、深い厚いお鍋でごはんが炊き上っていた。僕は小瀬の山の中で、毎日ごはんの薪を見ていたから、今日は僕が炊こうと、知義は自らかつて出た。女が二人もいるのに、お米を炊くのは女にまかせればよい。生煮えのごはんが出来たら、どうするのだろうと、阿梨子は知義の申し出を、一寸馬鹿にして聞いていた。

第二回目のお鍋が煮えて来たころ、知義は熱いお鍋の蓋を取って、アルミのパイ皿に、五人平等にごはんを盛り分けた。

皆の口の中はすき焼のこつてりとした味が、一面に沁み渡って、早くさっぱりとした、味のないごはんの味を欲していたから、素早くあついごはんをふうふう言いながら、口に運んだ、阿梨子は慎重に舌の上でお米を味わったが、一粒の生煮えのごはんも、阿梨子は見出せなかった。どの小さい粒も、ひと粒ずつふくらと艶もあり、おいしい味は口の中に広がった。知義という青年は、見かけによらず器用な人であると、阿梨子は先刻の意地の悪い考えを除いて、一寸感心した。だが、男がお米を炊くのが上手だということは、なんの自慢になるものでもない。しかし女しか出来ないと思っていたことを、不十分な状態でやりとげたのが、阿梨子を驚かせたのであった。

多すぎると思った材料は、すでに無くなっていた。皆は満足な顔をしていた。次はお茶である。お湯が沸くまで、めいめい煙草をけむらしながら、勝手なことを考えぼんやりとしまっていた。

空は何処迄も広い。雲ひとつなかった。山の天気は気まぐれが多い。何かのきっかけで、空一面に雨雲が展がり、思いがけない夕立に会うこともある、だが今日はその心配はないらしい。

知義はお茶をのみなから、一寸改まった形で言い出した。

「東京のごたごたが片づくまで、当分の間私達は此処に住むことになるでしょう。毎日何もきまった仕事があるでなし、唯ぼんやりと過してしまっても、無駄です。僕達兄弟で此の間から考えていたことがあるのです。阿梨子さん達の持っている本と僕達のを併せると、相当な数になります、簡単な読書グループを作って、読みたい本も手元になく読めない人の為に、貸し出そうと思います。それと平行して、僕の写真展みたいなものを開きたいのですが………。本を貸してもよいという人は、僕の友人の中にも三、四人はいます。こんなプラン、どうお思いですか。」

これらの計画に、阿梨子達は喜んで賛成をした。御一緒の仲間に入れて下さいと、邦彦は言った。

阿梨子と邦彦は、軽井沢に疎開する時、持っていた本全部を、木箱につめて送り出した。

阿梨子の女学生時代には、読書は一種の流行であった。女学生のお小遣いにふさわし